

中国と人権 研究も行動も

リレーおぴにおん

二刀流で行こう 7



自宅にはいつも、中国や香港などから来た人が誰かしら泊まっているんです。2010年ごろからでしょうか。

はじめは、黒竜江省出身の民主活動家、楊春林さんの息子さんです。父親が08年の北京五輪を前に「五輪より人権を」と訴えて、国家政権転覆扇動罪で有罪となるなか、日本の大学で学びたいと来日。農村などで社会調査をしていた私を頼って訪ねてきました。

3年ほど一緒に暮らし、今は日本で就職して結婚し、お子さんもいます。

中国の人権派弁護士の高さんなど我が家に身を寄せた人は、数カ月もの短期も含めれば10人を超えます。今も中国の女性弁護士が滞在しています。昨年1階を大勢が集える開放的なスペースにし、「あじあんコモンズ」と名付けました。ご近所さんも一緒に、自分たちの社会のあり方をわいわいがやがや自由に議論できる場にした。

私も助けられています。息子を保育

現代中国研究者

あことも
阿古 智子さん

1971年生まれ。東京大学教授。著書に「香港 あなたはどこへ向かうのか」「貧者を喰(く)らう国 中国格差社会からの警告」など。

園に迎えに行ってくれたり、食事を作ってくれたり。悩みを聞いてもらうこともあります。新聞配達やコンビニのアルバイトで学費を稼いでいる人も多く、家賃はいただきますが、お互い様。それがコモンズ、公共圏です。何より、楽しい。

実はこれは研究そのものでもありません。「参与観察」という手法ですが、内側に入り、責任や義務、苦楽をともにすることで信頼されてこそ、得られる情報があります。無理に質問はせず、聞き役に徹し、時間をかけて理解するように努めています。固定観念を排し、予断を持たずに得た「材料」から社会を分析していくのです。

ただ、中国当局から弾圧されている当事者と近しくなると、怒りや悲しみを共有し、こちらも苦しくなってきました。客観視できないほど対象と一体化してはいけません。そのバランスは心がけています。

それでも同時に、私は民主主義や言論の自由を守る役割を果たしてこそ、知識人だと思ふのです。中国や香港の人権問題について仲間とともに日本の政治家に訴える活動をしているのも、このためです。日本社会の民主や自由の価値を守り、広げていくために、研究し、行動する。両方そろって、私です。

(聞き手 編集委員・吉岡桂子)